錦織監督 映画の現場から

●○● 45

## 隠岐の奥深さ知る

# 真の日本の姿伝えたい

出雲市出身の作家、松本侑子氏著「神と語って夢ならず」という小説を読んだ。幕末、隠岐の島で農民3千人が蜂起し、世界初の自治政府を始めたというお話だ。「隠岐騒動」と言われているが、この小説では隠岐「維新」と書かれており、騒動と称されるのは武力弾圧した側の呼び名であることが分かる。

以前、隠岐酒造の毛利氏からこの話は聞いていたが、この小説をきっかけに隠岐の歴史的な部分を含め、あらためて隠岐に興味がわいてくる。竹島問題で注目されているので、隠岐の島といえば、多くの日本人は「ああ、あの竹島のある…」となるだろう。しかし、隠岐の歴史を振り返れば、古代より隠岐の黒曜石が全国各地に分布していることから、隠岐と全国各地がつながっていたのが分かる。

中世には後鳥羽上皇と後醍醐天皇が流されたことで京文化も入ってきている。江戸時代まで北前船が北海道から下関、関西を結び、交易で栄えており、裕福な農民や商人は京に上り、学問を修めていたという。

年に2千隻が来島していたということからも、物流の大きな拠点であり、ペリー来航の前から多くの異国船がやってきて異人が上陸していたので、文化と情報の交差点だった。島の人たちが世界の情報を手に入れ、意識的にも自立していて自衛の意識が高かったことが、この歴史小説から伝わってくる。

もとより隠岐は独特の自然環境により、固有種を育んでいる、日本でも有数の名勝地であることに違いない。小説になることで、あらためて隠岐の奥深さに触れることができた。

映画「渾身（こんしん）　KON―SHIN」で描いた古典相撲も、そんな隠岐の魅力の一つ。願わくば隠岐相撲の1勝1敗の精神が、アジアに、世界に広がってくれればと思う。海外では日本人は消極的とか優しすぎるとか言われるが、綿々と伝わる日本人のおもんばかる精神、武士道に通じる精神は世界に誇れるもの。映画や小説などエンターテインメントの力で、もっともっと多くの人が真の日本の姿を伝えなくてはならない。互いを知り、理解し合うことこそが平和への一番の近道なのだから。

映画「渾身」より

世代を超え、時代を超えて語り継がれなければならない日本の文化は、現在は知られなくとも、多くの日本人、世界の人の心に必ず伝わると信じて映画を撮り続けたいと思っている。

先日、浜田、益田で映画「渾身」の上映会が行われ、おかげさまで記録的な観客動員だった。石見でも多くの皆さんにご覧いただくことができてとてもうれしい。応援していただいた多くの皆さまに心より感謝している。

（錦織良成・映画監督）

＝第2、4金曜掲載＝